

南薩地域の中心地にふさわしいまちづくり拠点を目指します

実施方針 01 親しまれ、スリムな行政組織を体現する庁舎整備

ポイント①【基本方針 1】

敷地全体を活かす

恵まれた敷地をフル活用した
フェーズフリーのグランドデザイン

ポイント②【基本方針 2・3】

低層 2 階建てコンパクト庁舎

市民・職員の使いやすさの徹底

ポイント③【基本方針 4・5】

風土に溶け込む象徴性

すべての人が納得できる
「心地よさ」「親しみやすさ」の体現



【はるか開聞岳を臨む新庁舎の佇まいのイメージ】

実施方針 02 組織設計 × 県内設計 × 市内設計による一体的協働体制

- 豊富な庁舎設計実績やまちづくり経験をもつ組織設計事務所と地域に精通する県内・市内設計事務所との相乗効果により、この地ならではの庁舎を目指します。

組織設計：防災・環境技術・木材活用の実績

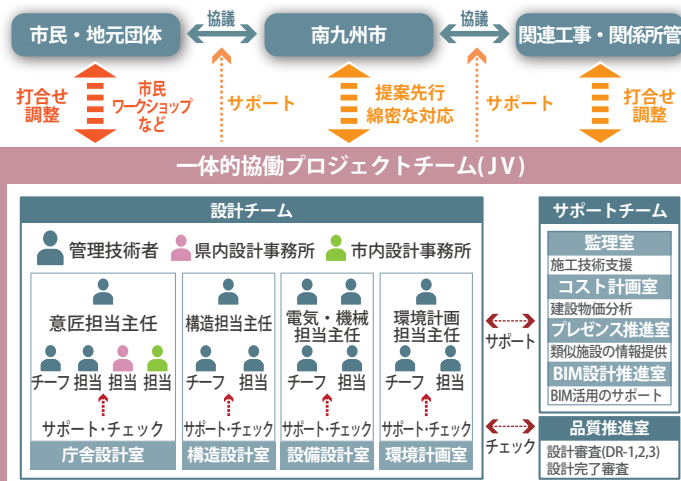
庁舎や防災施設、大規模木造公共施設の豊富な実績を活かし、高品質な計画を実現します。

県内設計・市内設計：周辺での公共設計実績

地元に事務所を置くメリットを活かし、実態調査やアンケートなどきめ細やかな意見収集、地域の素材や技術の掘り起こしを行います。

環境計画室の参画

- 環境配慮技術の選定、計画、その効果検証や評価を専門に行う「環境計画室」が参画し、実効性のある技術提案を行います。
- 組織設計事務所は ZEB 実証事業への補助金申請に必要な「ZEB プランナー」の資格を有しており、補助金申請を含めた ZEB 実現への一連のプロセスについて検討し、確実な認証取得を実現します。



【一体的協働体制表】

実施方針 03 対話を重視した業務推進による相互理解と意見集約の工夫

対話により要望をくみ取る設計手法

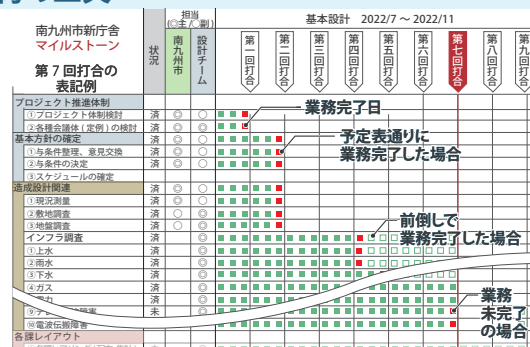
- 担当部署や職員の方々、地域住民との対話で要望をくみ取り、計画案に反映するプロセスを重ねる対話型の設計を行います。

提案先行型設計による確実な業務推進

- 設計着手時にマイルストーン管理表を作成し、「いつ」「だれが」「なにを」決定する必要があるかを関係者全員で共有します。これにより意見・要望を確実に計画に反映するとともに、設計の停滞や手戻りを回避し、密度の高い設計成果を実現します。

様々なツールの活用によるスムーズな合意形成

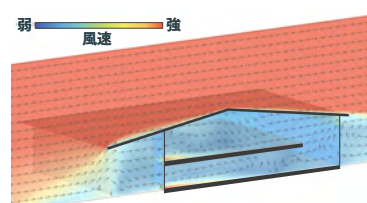
- 打ち合わせでは、イメージパースや模型、BIM、VR 技術などの視覚的に分かりやすいツールを活用し、迅速なイメージ共有を行うことにより、早期の合意形成や品質向上に努めます。
- 室内の気流や温熱環境においては、具体的なシミュレーションを基に開口位置や寸法を決定します。



【マイルストーン管理表】



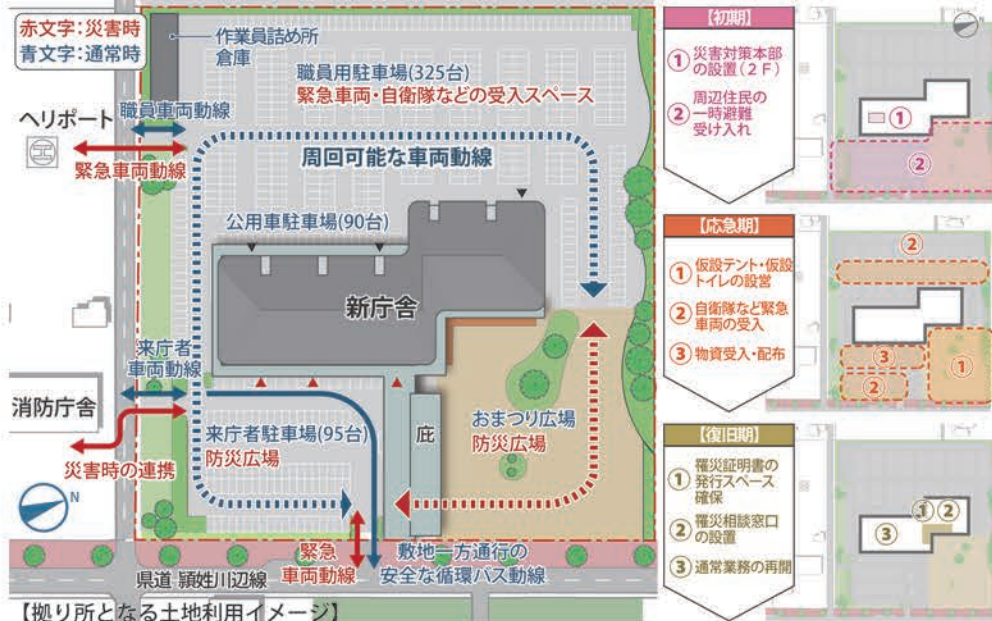
【BIM 活用のイメージ】



【気流解析シミュレーション】

基本方針1 地域の安心・安全を支える防災拠点となる庁舎

いつでも市民の拠り所となる防災庁舎

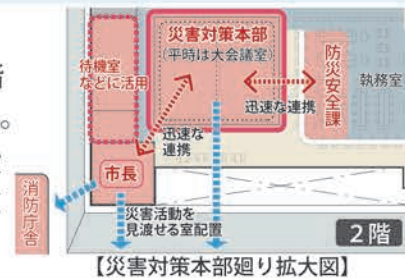


1-01 敷地全体を活かした防災拠点

- 敷地中央に庁舎を配置し、周囲に広場や駐車場の屋外スペースを広く確保することで、通常時の庁舎利用者の利便性を高めるとともに、非常時は市民の拠り所となる防災広場として機能します。
- 周回可能な車両動線により、災害時の土地利用の柔軟性を確保します。
- 南側の消防庁舎やヘリポートとの連携にも対応します。

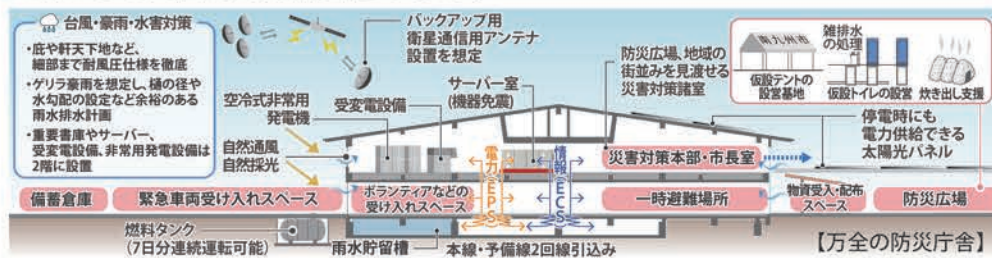
1-02 迅速な防災対策拠点の設営と連携

- 災害対策本部や市長室などの活動拠点は、防災広場や災害活動の様子が見渡せる2階南東に集約し、迅速な対応を可能にします。
- 大型スクリーンや高遮音移動間仕切壁を設置した大会議室は災害の種類や規模に柔軟に対応します。



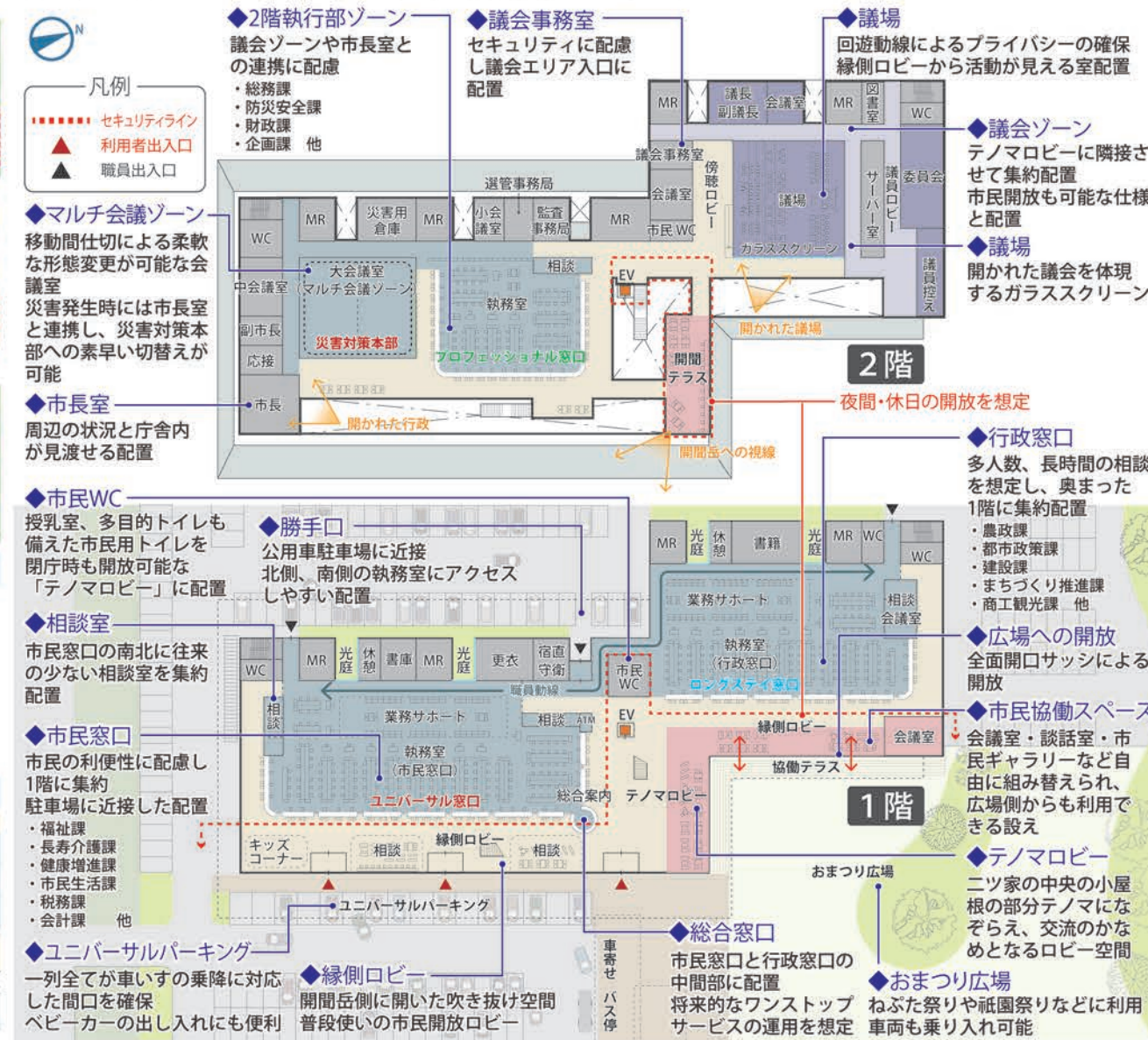
1-03 BCPを確実に実行できる防災庁舎

- エネルギー事業者などにより公開された情報や推測される各種ライフライン途絶期間の情報を基に、インフラ供給の多重化や耐震性・備蓄量に対応させた合理的な計画とします。



基本方針2 すべての人にやさしい庁舎

市民が快適に過ごせる利用者本位の庁舎づくり



1-04 安全性と経済性を兼ね備えた構造計画

強靱性とロングスパンを実現する安全・安心な耐震構造

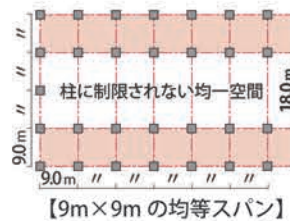
- 低層庁舎、地盤形状、ライフサイクルコストに鑑み、総合的に優位な耐震構造を採用します。
- 超ロングスパン、高層階を回避し均等スパンとすることで、コスト合理性の高い耐震安全性I類を確保します。

評価項目	耐震構造	免震構造
LCC	○	×
耐震性能	○※	◎
地盤	○	△
工期	○	△
評価	◎	○

※部分免震、家具の転倒防止対策を行う【免震構造と耐震構造の性能比較】

均等スパンによる構造安定性

- 9m×9mを基本グリッドとし、コストの合理性・施工性を高めます。グリッドに囲まれた中央部分は18mのロングスパンとし執務レイアウトやカウンターラインの柔軟性を確保します。バックゾーンが集中する西側には、耐震要素をバランスよく配置します。



2-01 クルマとヒトのやさしい関係づくり

便利で優しい来庁者本位のユニバーサルパーキング

- 来庁者の多くが車利用であることと、自動運転やEV車など、今後のモータリゼーションの変化を踏まえ、車→底空間→窓口がひとつづきとなる来庁者本位の空間とします。
- 底空間には駐車ゾーンやバス・タクシーの停留ゾーンを設け、天候(雨天/猛暑など)に左右されずに利用可能な庁舎とします。

安心・安全に配慮した駐車スペース

- 底空間の駐車スペースはすべて余裕のある幅(3.0~3.5m)とすることで、車いす利用やベビーカーの出し入れ、子どもの安全に配慮します。

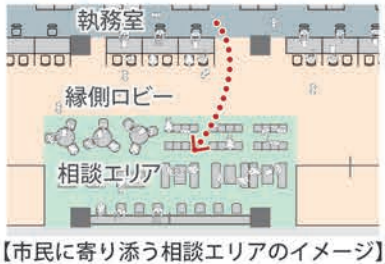


2-02 縁側ロビーを軸としたマチの居場所の創造
1階への機能の集約

- 一般の来庁者が利用する機能を全て1階に集約し、使いやすい庁舎を目指します。
- 来庁者を迎え入れる庁舎東面を「縁側ロビー」とし、協働テラスや情報発信コーナー、キッズコーナー、総合案内などの機能が面した様々な市民の居場所を提供します。
- 縁側ロビーはおまつり広場とのつながりに加え、2階の行政・議会機能とも吹き抜けを介してつながる空間とし、にぎわいの軸を形成します。

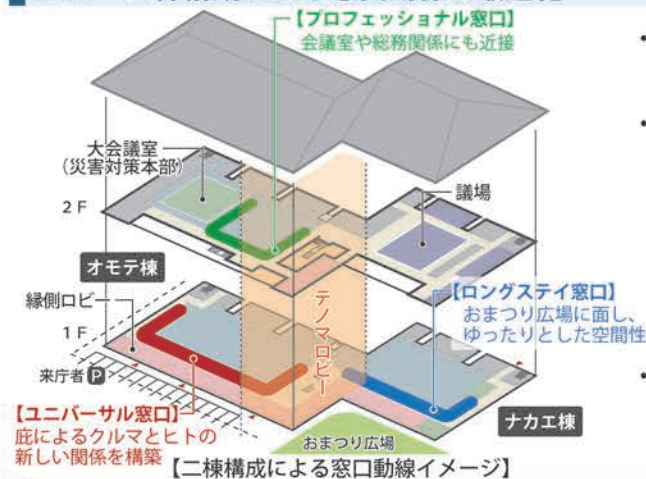
市民に寄り添う相談エリア

- 縁側ロビーの一部にソファやテーブル席のあるカフェのような待合空間を設けます。
- 相談エリアは執務空間の近くに配置することで職員が直接出向いて市民の相談に乗りやすい計画とします。



わかりやすさ、使いやすさを徹底したシンプル庁舎

3-01 二棟構成による窓口動線の最適化



- ・二つの整形な平面を組み合わせ大屋根を設けた、本地域の武家屋敷の特徴にもある二ツ家型のシンプルな建物形状とします。
- ・二棟構成により、目的と利用者に応じた空間性をもつ3タイプの窓口を配置することができます。

ユニバーサル窓口	1F	市民生活課などの市民サービスを行う窓口
ロングステイ窓口	1F	農政課や都市政策課などの行政相談を行う窓口
プロフェッショナル窓口	2F	総務課や企画課など執行機関を中心とした窓口

- ・3つの窓口は、二棟をつなぐ建物中央のテノマ（二ツ家の小棟）ロビーに全て面する構成とし、わかりやすく、来庁者の移動距離の短縮を図ります。

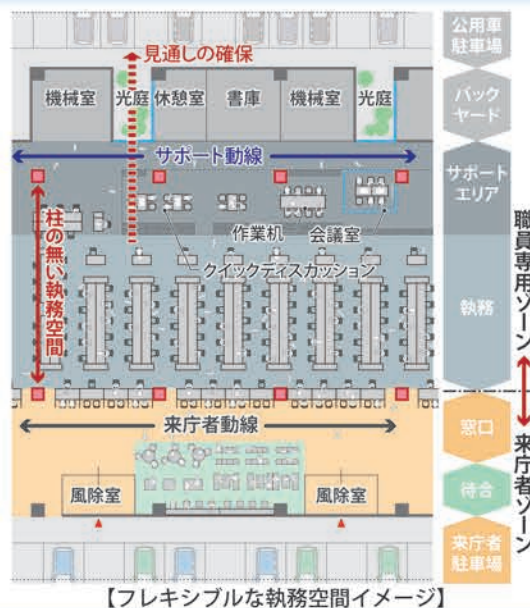
3-02 快適かつフレキシブルな執務空間

将来ニーズに柔軟に対応

- ・シンプルな平面形状と執務空間に柱のない架構形式により、組織構成の変更や窓口のデジタル化などによるレイアウト変更にも柔軟に対応可能な計画とします。
- ・相談室や会議室は、在来の間仕切りではなく家具やパーティションにより空間を構成し、可変性の確保とスペースの効率化を行います。

業務の効率化を図るサポートエリア

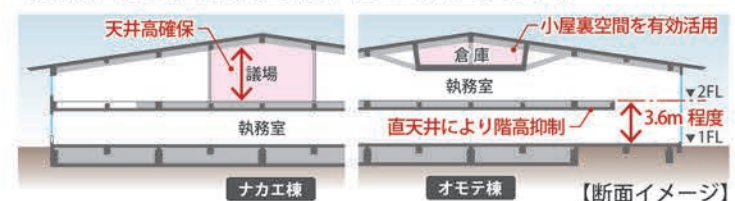
- ・執務室に隣接するサポートエリアには、簡単な打合せを行うクイックディスカッションスペースや、Web会議も行える会議室、作業机などを設置します。
- ・来庁者と動線が交錯しないサポート動線（職員専用動線）を設けることで、効率的な業務遂行を可能にします。
- ・休憩室や更衣室は光庭に面する職員専用ゾーン内に確保し、職員が安心して利用できる計画とします。



3-03 機能とコストを両立させるコンパクト庁舎

1階階高の抑制

- ・無理のない構造計画と天井内配管を不要とする設備計画による直天井を採用することで、1階階高を3.6m程度に抑えます。
- ・階高を抑えることで、2階への移動がスムーズになり階段面積も縮小します。
- ・外壁面積や躯体ボリューム、室内の気積が圧縮され、建設、維持管理費の縮小につながります。



二ツ家の寄棟形状を使い切る断面構成

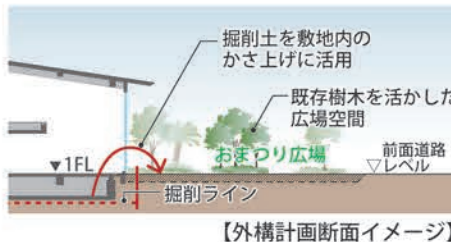
- ・オモテ棟では、高い天井が不要な執務室上部に小屋裏を形成し、床面積に算入されない倉庫を設けることで寄棟形状を無駄なく活用します。
- ・ナカエ棟では、一定の天井高さを必要とする議場を配置します。

メリハリのある外壁構成

- ・主採光面であり、開かれた庁舎を体現する東面は、地域の技術で作上げる木製サッシを用いたガラスファサードとします。
- ・南北面は、使いやすく低廉な引違い窓による横連窓とします。
- ・西面は開口部を絞りながら、西日を避けた光庭を設けることで換気と採光を確保します。

経済的な外構計画

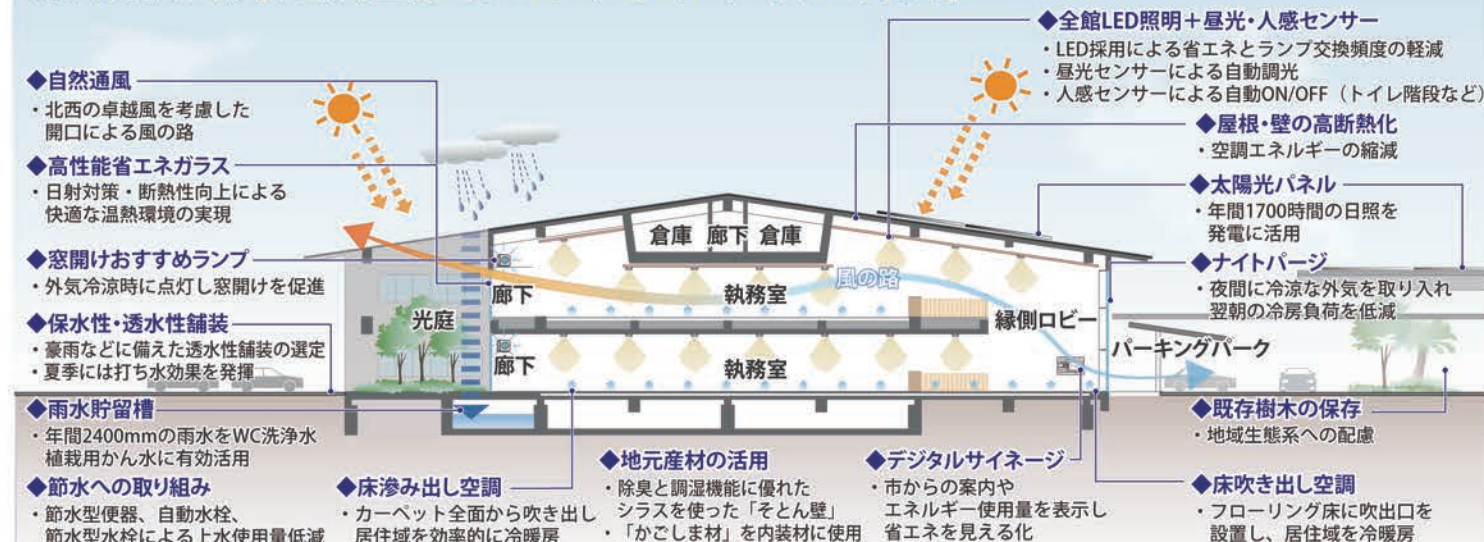
- ・透水性舗装の採用により、強雨時の雨水側溝・配管や水路への負担を軽減し、メンテナンス頻度とコストの削減を図ります。
- ・既存樹木を最大限残す計画とし、記憶の継承と植栽伐採費用の削減を図ります。
- ・掘削土を周辺地盤のかさ上げに利用することで、残土処分費を削減します。



基本方針4 環境にやさしい庁舎

南九州の環境と共生するパッシブデザインの庁舎

【パッシブデザインイメージ】



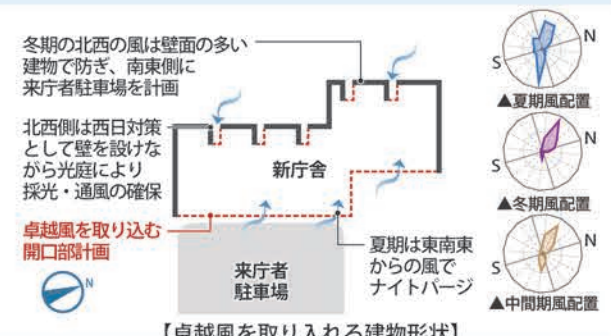
4-01 敷地の自然の恵みを活用した建物形状

西側から安定した天空光を採り込む「光庭」

- ・西日を制御しつつ執務室から公用車駐車場への見通しを確保し、執務ゾーンの通風・採光を行う「光庭」を設けます。

地域に抜ける卓越風を活かす「縁側ロビー」

- ・南北を貫く縁側ロビーから西側の光庭を通る「風の路」を計画します。
- ・夏季は昼夜の気温差が大きい気候特性を活かし、夜間の冷涼な外気を庁舎内に取入れ躯体を冷却します（ナイトパージ）。



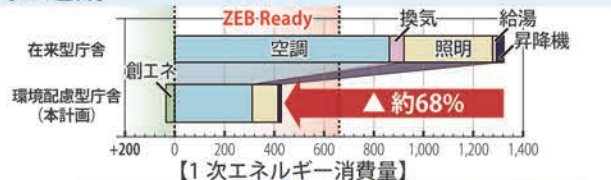
4-02 1次エネルギー消費量を約7割削減し、ZEB Readyを確実に達成

ZEB Readyの実現

- ・本提案では、「ZEB Ready」を達成する設計を行います。さらに今回は災害拠点施設も兼ねるため「レジリエンス強化型 ZEB 実証事業」の活用を検討します。
- ・ZEB 設計の実績を活かし費用対効果を考慮しながら、採用する技術を多面的に検討します。
- ・ZEB 補助事業の採択にあたって CLT の利用条件を満たせば優先的に採択を受けられます。豊富な CLT 実績を活かし、適所に CLT を採用することで、ZEB 補助事業の採択に尽力します。

太陽光エネルギーの効率的活用

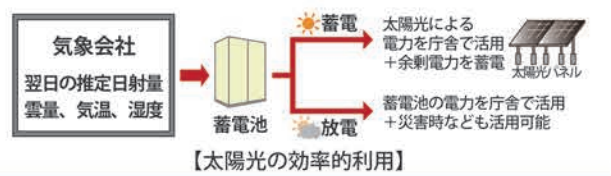
- ・太陽光パネル、蓄電池は、気象会社から翌日の気象予測データをオンラインで取り込み、日射量や雲量に応じて蓄電量や放電量をコントロールする、経済性や環境性の高い運用を行います。



	ZEB Ready	レジリエンス強化型 ZEB Ready
補助率	1/3 (33%)	1/2 (50%)
一次消費エネルギー削減率	50%	50%
設備維持コスト	○	△
維持管理コスト	○	○
コストパフォーマンス	○	◎

【ZEB 事業比較表】

【CLT 実績（組織設計事例）】



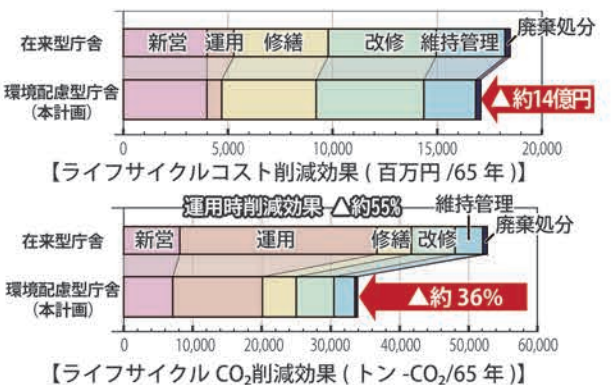
4-03 環境負荷の低減に配慮した庁舎

費用対効果と啓発効果による省エネ

- ・環境配慮技術は効果検証と評価、投資対効果を十分に検討し、実効性の高い技術を優先的に採用します。
- ・市民への啓発効果という観点からも総合的に判断します。

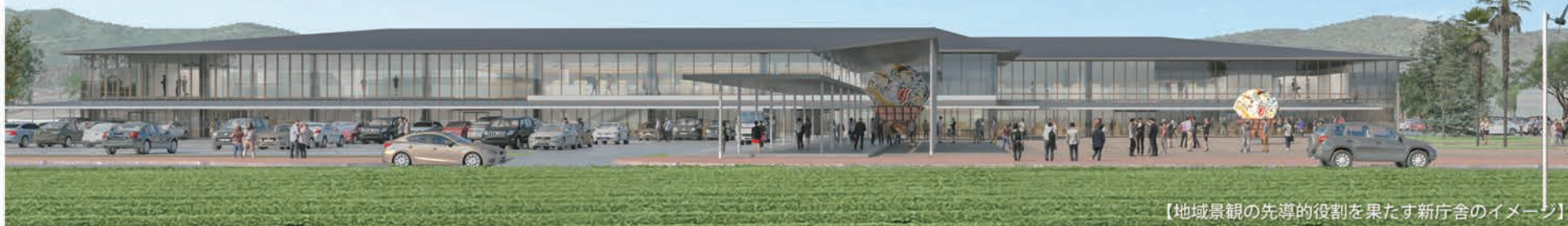
環境配慮効果の試算

- ・これらの取り組みにより、同規模の在来型庁舎に比べて65年間のライフサイクルコスト（建設、光熱水費、改修、修繕、維持管理に関わるコスト）を約14億円削減可能です。
- ・同規模の在来型庁舎に比べて、65年間のライフサイクルCO₂を約36%削減可能です。



ひろがる茶畑に溶け込み、「ニツ家」が醸し出す「親しみやすさ」を 体現する屋根のある風景を提案します

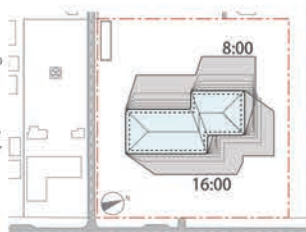
地域に守り続けられた武家屋敷の「ニツ家」には、この地ならではの親しみやすい佇まいがあります。これをイメージの源泉として私たちは「フラッと立ち寄りたくなる」庁舎を目指します。



【地域景観の先導的役割を果たす新庁舎のイメージ】

5-01 周辺環境へのインパクトを最小化する 高さを抑えた2階建て庁舎

- 周囲の民家や畑に一切影を落とさない配置、ボリュームとします。
- 東の顔桂川辺線から十分なひき(約60m)をとり、市民の誇りとなる風景を創ります。
- 大屋根をかけ、軒を出し、壁面に陰影を落とすことで茶畑の水平ラインに調和した穏やかな正面性を創出します。

【日影図】
敷地中央への建物配置と低く抑えた屋根による敷地外に影を落とさない計画

5-03 観光によるまちづくりへの貢献

新庁舎を起点としたまちづくり

- 計画地の周りには、知覧武家屋敷庭園をはじめ、豊かな観光資源に恵まれています。
- 庁舎をこれらの観光資源の南の起点と位置付けます。外部からも直接利用できるロビーやトイレ、授乳室を設け、観光客にもやさしい施設づくりを目指します。



【敷地周辺施設】

既存樹を活用した「おまつり広場」

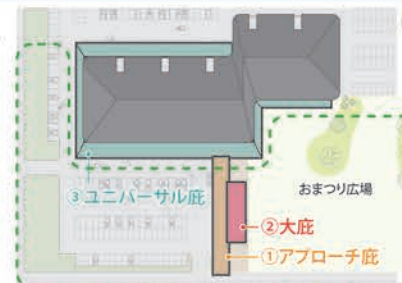
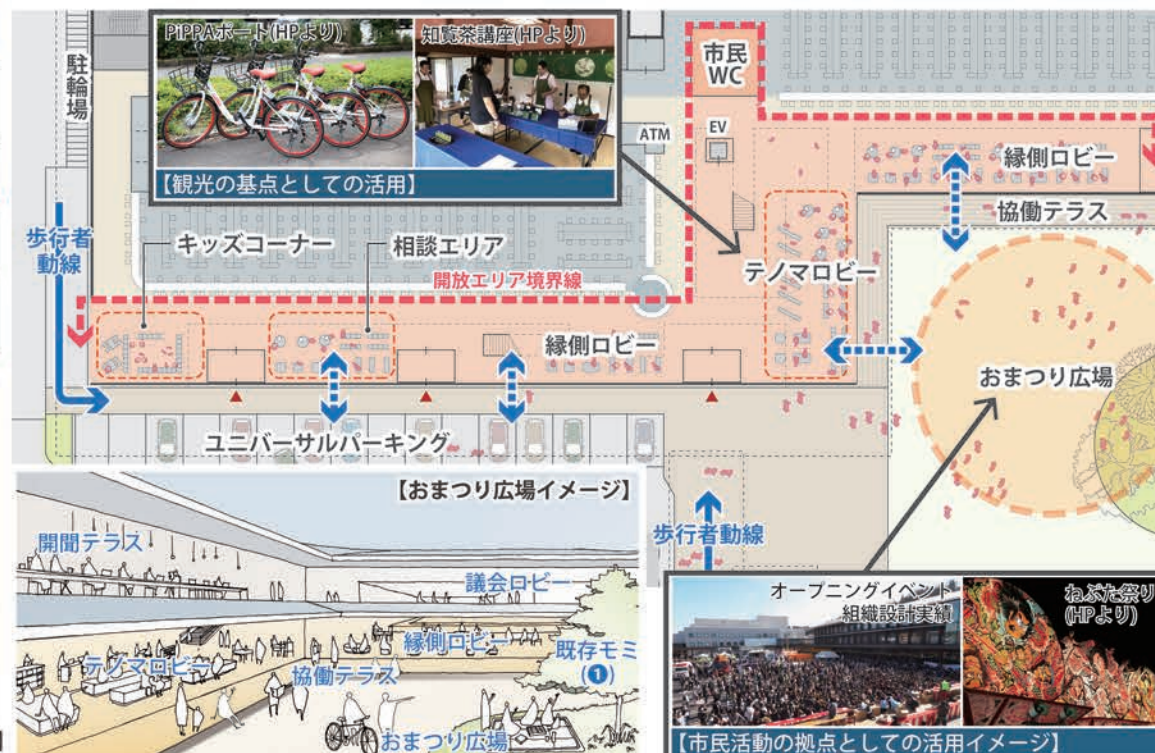
- 既存の大樹により、広場に豊かな緑陰を形成します。
- キッチンカーの設置などに対応した舗装を施し、多様なイベントに対応します。
- 荒天時の利用や知覧ねぶたの展示に配慮し、アプローチ庇と連続する大庇を設けます。



【おまつり広場で活用する既存樹】

5-02 庁舎のアイレベルを彩る3つの庇

- 大屋根とともに高さの異なる3つの庇が親しみやすく、機能的な半屋外空間を創出します。
- ①道路と庁舎をつなぐアプローチ庇 (H:3.5m)
巡回バスやタクシーの停留などのゆったりとした車寄せ機能を併せ持ちます。
- ②広場側に開いた大庇 (H:5.0m)
多彩なイベントや知覧ねぶたの展示に対応します。
- ③庁舎をやさしくつつむユニバーサル庇 (H:2.3m)
駐車場から雨にぬれずに窓口まで到達でき、縁側ロビーと一体となって市民交流を促す場となります。

【庇の配置と市民開放のエリア】
休日も開放する屋外エリア
まちづくりの拠点として活用

【おまつり広場イメージ】



【市民活動の拠点としての活用イメージ】

5-04 地域の英知を集結した庁舎

南薩木材の活用

- 庇の屋根を構成する構造材にはCLTを使用します。
- 東側ロビーの窓は、アルミサッシではなく、地域の木材を地域の技術で加工した木製建具とします。
- 内部の天井には、地域の流通材を加工した木製ルーバーを使用します。

- 床吹き出し空調で仕上げが自由な床は、地域産木材のフローリングを採用します。
- 地元作家とのコラボレーションを通して地域の伝統工芸をインテリアに取り入れます。
- 照明器具は川辺町の仏壇技術を活かして制作します。

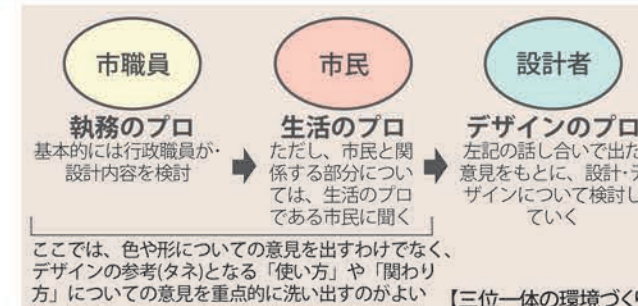


木造・木質化組織設計実績

その他の提案 本業務を進める上で有効な独自提案

6-01 三位一体の環境づくり

- 単に市民の意見を伺うという姿勢ではなく、市職員・市民・設計者それぞれが、各々の得意分野で力を発揮できる三位一体の環境をつくり、庁舎計画を練り上げます。



【三位一体の環境づくり】

三位一体の環境づくり手法

STEP1【まち歩き】

設計者、市民、市職員が一緒にまちを歩きます。まちの現状や既存庁舎の問題点など把握・分析し、与条件を素早く整理します。

STEP2【市職員WS】

市職員からなる目的別のワーキンググループで、使い勝手、サービスの在り方などを議論します。

STEP3【市民WS】

世代間WSを軸に利用者である市民の声を集めます。市民の関わり方や協働の在り方など、市民生活に寄与できる市庁舎を考えます。



世代間交流WSの提案(市民WS)

- 今後ますます加速する少子化、超高齢化に対して、多様な市民の「今の声」を集めるため、各世代ごとのWSを開催することを提案します。
- 世代WSの後、合同WSの開催も想定します。

各WSの参加者イメージ

- 世代間WS
世代参加者、市職員、関係者、ファシリテーターにより構成



- 合同WS
各世代コアメンバー、市職員、設計者、ファシリテーターにより構成

■中高生WS:

南九州市の未来を担う世代の方に、市政やまちづくりに興味をもってもらうことも目的として開催

■子育て世代WS:

子育てをされている方の70%が仕事を持つ現在、庁舎がどれだけ寄り添えるかがテーマ

■現役・エルダーWS:

図書館、福祉センター敷地内整備も視野に入れ、ソフトからハードまで幅広く意見を聴取

年度	令和4年度						令和5年度	令和6年度	令和7年度
月	7	8	9	10	11	12	1	2	3
設計・工事	基本設計						実施設計		
意見聴取・公表	反映	反映	反映	公表			公表		
市職員WS	第1回	第2回	第3回						
世代間WS									
合同WS									

【世代間WSを核としたスケジュール】

新庁舎建設だよりやウェブサイトによる情報公開

- 設計段階においても「新庁舎建設だより」や市のウェブサイトなどを活用し、新庁舎への市民の関心を深めます。

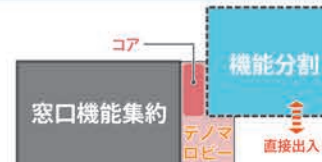
PRイベントの開催

- 市民代表・市職員代表・学識者・設計者などによるトークイベントやWSのパネル展示などの開催を想定します。

6-02 将来を見据えた庁舎づくり

ニツ家のメリットに倣った分離可能な雁行プラン

- 建物を絞った中央(テノマ)にコアを設置することにより機能分割が可能な施設構成とします。
- 将来の行政機能の縮小時には、他の機能への変更や別用途の誘致を可能にすることにより長く使い続けることができる庁舎をつくりま



【機能分割のイメージ】